

はしがき：「外邦図」のこと

石原 潤（奈良大学）

「外邦図」とは旧日本軍が外地について作成した地図のことである。その種類は数万点に及び、大部分は5万分の1や10万分の1の地形図であるが、小縮尺図や海図なども含まれている。この膨大な地図は、何時、何のために、どのような方法で作られ、戦後どのように処理され、現在どの程度残存しているのか。私達は最近このような疑問の追求に、いささか「はまって」いる。

私が最初に外邦図を見たのは、40年ほど前、まだ京都大学文学部の院生であった頃である。戦後資源科学研究所に所蔵されていた外邦図の一部が、お茶の水女子大学の浅井辰郎教授の取り計らいで京都大学文学部地理学教室に収蔵されることとなり、事務の女性が整理しているのを、横からながめていた記憶がある。その時は、自分が将来これらを利用することになるとは、夢にも思っていなかった。

外邦図の利用を最初に思いついたのは、30年ほど前、中国の集市（定期市）の歴史地理学的研究を始めて、方志（地方誌）記載の集市について正確な分布図を作成するため、大縮尺の地形図を探していた時である。たまたま古書市場に出ていた民国製10万分の1地形図や、京都大学人文科学研究所所蔵のそれを利用したが、対象地域の図幅を欠くことがしばしばで、窮余の策として京都大学文学部所蔵外邦図中の中国の地形図を引っ張り出した次第である。

一言で言えば民国製図も外邦図も私の研究に大いに役立ったのであるが、それらを利用して気が付いた点はいくつかあった。まず、日本軍が極めて早い時期（明治後期）から中国の地形図を独自に作成していたこと、ただしそれらは図の様式こそもっともらしいが、集落の位置や地名に誤りが多く、しばしば使いものにならない代物であったことである。これに対して民国期に入って各地の軍団が作成した地形図は、総じて図式が稚拙であるが、内容はおおむね正確であり、研究用のベースマップとして耐えうるものであったこと、また、おそらく民国製図を参照して作られた昭和期の外邦図は、図の様式や正確度において最も優れたものとなっていたことである。

二度目に外邦図の利用を試みたのは、20年ほど前、インドの市場の研究に取り組んでいた時である。私は1981年から82年にかけてロンドン大学に滞在し、大英図書館、旧インド省図書館、東洋・アフリカ学院図書館などで、インドの定期市に関する諸資料を収集し、特に19世紀以来の旧英領インドの地形図（1インチ=1マイル図等）が、市場の所在地や市日をも記載する格好の資料であることを確認していた。しかし限られた時間と予算では、膨大な量の地形図のコピーを手に入れることは出来ず、若干の事例地域に

ついて得たのみで満足せざるをえなかった。

帰国後 84 年から、科学研究費の海外調査でインドとバングラデシュの伝統的市の現地調査に従事するようになるのだが、現地での地形図の入手は容易ではなかった。インドでは地形図は市販されてはいるが、国外持ち出しは禁じられており、国境や海岸線から 100 マイルまでの図幅は市販さえされていない。また、バングラデシュでは地形図は一切販売されていない。地理学のフィールドワークに不可欠の地形図をどうするかで、やはり窮余の策として思いついたのは外邦図の利用であった。その頃私は、外邦図の一部が広島大学文学部地理学教室にも所蔵されていることを知るようになっていたので、京大・広大の両方で必要分をコピーさせてもらい、現地へ持参した。

戦前の英国製図も日本軍による外邦図も、現地調査には充分役立った。現在では行政区画にかなりの変更があり、相当数の新しい道路が走ってはいるが、集落や地名の大半は往時と比べて大差ないからである。その際、英国製図と外邦図とを比べて見て、面白いことが分かった。まず、外邦図は基本的に英国製図の「コピー」であって、縮尺を変え（例えば、1 インチ = 1 マイル図の 6 万 3360 分の 1 を、5 万分の 1 にする等）凡例の説明を日本語に書き替える等の改変がほどこされているに過ぎないことである。従って、私にとって都合の良いことには、定期市の立地点や市日もしっかりコピーされていたのである。次に、英国製の 1 インチ = 1 マイル図は全インドをカバーしていたにもかかわらず、外邦図の 5 万分の 1 図はアッサムとベンガルをカバーしているのみで、その他の地域については 4 分の 1 インチ = 1 マイル図を改変した 25 万分の 1 図や、2 分の 1 インチ = 1 マイル図を改変した 12 万 5 千分の 1 図のみが作成されていたに過ぎないことである。インパール作戦に見るように、日本軍はアッサムを攻略しようとしていたのは紛れもない事実であるが、インド侵攻後の作戦地域はベンガルまでを想定していたのではあるまいか。

外邦図を利用した三度目は、10 年余り前から開始した中国でのフィールドワークにおいてである。以前には夢想だに出来なかった中国での現地調査が、可能になり始めたのは 80 年代末からである。私は 88 年に江南デルタで初歩的な調査を行い、95 年から、科学研究費の国際学術研究によって、河南省で 3 回、四川省で 3 回の現地調査を実行することが出来た。ところが、中国では現在多色刷りの優れた 5 万分の 1 地形図が出来ているにもかかわらず、外国人はこれを手に入れることも、見ることも許されない。やむをえず我々は外邦図や民国製図のコピーを持参した次第である。

その際、これらが充分役立ったかと言えば、残念ながら「否」である。革命後の計画経済期と近年の市場経済期を経て、中国の変貌はあまりにも著しい。集落も交通路も地名も行政区画も随分変わってしまった。ただ自然地形には変化がないので、それらの持

参が全く無意味だったとは言えないし、土地利用や景観の変化を実証する資料としては有効であった。

以上のように、日本帝国主義の遺物であるこれらの外邦図が、今も一定の利用価値を保持していることは否定出来ない。現代の地形図の入手と利用が不可能な国々（実はアジアのほとんどの国がそうであるのだが）ではフィールドワークの伴侶として、地形図の購入が可能な国々でも歴史地理学的な一級資料として、その利用が考えられるのである。

このようにいわば「ユーザー」として外邦図に関わるようになった私は、まず外邦図がどのような機関にどの程度収蔵されているかを調べ始めた。手探りで調べていくと、外邦図は京大文学部、広大文学部の他に、東北大理学部、東大理学部、お茶の水大文教育学部のそれぞれ地理学教室と、国会図書館とに大量に収蔵されていること、しかしながらそれらの収蔵図幅は互いに異なっており、相互チェックに基づく所在目録の作成が待たれることなどを認識するようになった。また、以前勤務していた名大文学部の地理学教室に、地質学者の名誉教授嘉藤良次郎先生から、一定量の外邦図をご寄贈いただくという幸運にもめぐり会えた。さらに、地形図収集で知られる岐阜県立図書館・分布図センターの顧問をしていたおかげで、東北大所蔵の外邦図の重複分が国土地理院資料館と分布図センターとに分与されたことを知り、早速東北大学に申し出て同様の分与の恩恵に浴することが出来た。ただし東北大と京大の関係は、単なる一方的な分与関係ではなく、相互に欠ける図幅をチェックしそのコピーを提供し合うという、より互恵的な形で行われた。

こうした活動を続けている内に、外邦図に興味を持つ多くの同士にめぐり会えたのも幸いであった。東北大学の田村俊和教授（現立正大）、大阪大学の小林茂教授、甲南大学の久武哲也教授、神戸大学の長谷川孝治教授等である。その後小林教授を研究代表者として申請した外邦図研究の科研費が昨年度より採択されて、研究は一挙に加速した。研究グループにより明らかにされつつある点は、おおよそ以下の通りである。

外邦図の作成は明治期より朝鮮半島、次いで中国大陸を対象に始まった。初期には、特務機関の関係者が基本的測量や観察・聞き取りにより情報を収集した。清朝末には、多くの中国人留学生が日本の軍関係の学校で測量や地図作成を学んでおり、中華民国成立後も、中国地図製作関係者と日本側との関係は深かったと推測される。その後日本軍は、民国製地図のみならず、東南アジア、インド、太平洋諸島に関しても、植民地宗主国が作成した地図を何らかの方法で入手し、それを改変して外邦図を作成した。外邦図が作成された領域は、北はシベリア、西はインド亜大陸、南はオーストラリア、東はアメリカ西海岸に及んでおり、軍事作戦の可能性のある地域を網羅していたと考えられる。ただし、大縮尺地図の作成まで行った地域と、小縮尺地図に止まっていた地域があった

ことは、インドについて述べた通りである。日中戦争や太平洋戦争が始まると、日本軍は占領地や作戦地について、測量や空中写真に基づく独自の地図作成を実行する。実戦のための情報を盛り込んだ兵要図も多く作成された。

敗戦とともに外邦図は数奇な運命をたどる。多くの外邦図は終戦の際に日本軍関係者によって焼却された。しかしその価値を惜しむ人々によって、かなりの外邦図が焼却をまぬがれた。最大のセットは、陸地測量部の地図作りを受け継いだ現国土地理院に引き継がれたが、ある時期に現防衛庁の機構に移管された。大きなセットが、旧資源科学研究所、東北大地理学教室などに持ち出され、前者のセットはのち、お茶の水女子大学、京大文学部、同東南アジア研究センター、広大、立教大などに分配された。後者からの分与の流れは、既に述べた通りである。外地及び内地で外国軍により押収された外邦図は、さまざまなルートを経てアメリカ、イギリス、オランダ、オーストラリアの図書館・公文書館などに収蔵されている。なお米軍は、朝鮮戦争にこうした日本製地図を使った可能性がある。

このように、外邦図は日本帝国主義の拡大と共に増幅し、その終焉と共に離散した。しかし、その作成時の意図とは独立に、その後は独自の効用によって今なお保存され利用されている。かつては高度の軍事機密であったが、現在はその多くが公開されている。それらはアジア・太平洋諸国の人々にとっても貴重な資料たりえよう。したがって、私達が緊急になすべき事は、全世界に及ぶそれらの所在リストの作成であろう。とりわけ私自身の当面の課題は、地理学教室の若い人たちの助力を得て、現在は京大総合博物館に収蔵されている外邦図について、書誌的情報を含む完全なリストを作成し、大方の利用に供することであると考えている。

(『以文』[京大以文会], 46号[2003], 4-7頁から一部訂正して転載)